

夕日が照らす極楽浄土 日想観の法要 大阪市天王寺区

中世の頃まで、大阪の姿は現在とはかなり違っていた。上町台地の西側には海が迫り、視界を遮る建物や森林もない。聖徳太子が創建した四天王寺（大阪市天王



寺区)の辺りは大阪湾の方向に沈む夕日を眺める絶好の場所だった。中世は浄土信仰が広がった時代でもあった。釈迦の没後1500年後には仏の教えが守られない恐ろしい末法の世が来る。阿弥陀如来のいる極楽浄土に導いてもらおうと、人々は祈りをささげた。

■修行の中心地に：はるか西方にあるとされる極楽浄土に行くにはどうすればいいのか。観無量寿経（かんむりょうじゆきょう）はその方法として、浄土の情景を思い浮かべる修行「観想」を16種類、記している。その最初に説かれているのが、西方の浄土を思って日が没する様子を見詰める「日想観」。四天王寺はその修行の中心地としてにぎわったという。春と秋の彼岸の中日、四天王寺からは六甲山系と淡路島の中間の水平線に沈む夕日が眺められた。四天王寺の南谷恵敬執事は「真西の方向が山でも島でもなく海である立地もあって、ここが日想観を修める絶妙の場所と考えられたと思います」と語る。真偽は不明だが、日想観修行の最古の例は延暦6年（787年）に行った真言宗の祖・空海とされる。浄土信仰は皇族・貴族から庶民の間にまで広まり、遅くとも11世紀には四天王寺の西門が極楽浄土の東門に接しているという信仰が確立していたらしい。



西門の西にある鳥居の扁額（へんがく）には「ここは極楽の東門」という意味の文字が描かれている(大阪市天王寺区)



一心寺の窓、西の空眺めやすく

阿弥陀仏というより外は津の国の 難波のことも葦刈りぬべし

このお歌は、法然上人が、後に天台座主になられた慈円大僧正に招かれ、津（摂津）の国の難波（今の大阪市）にありますが四天王寺に参られた時にお詠みになったと伝えられております。

法然上人はこの時、四天王寺の西門の近くに、四間四方の草庵を結ばれ、日想観を修し、はるかに西、難波の海原へと太陽が沈むその光景をご覧になられ、そこにある西方極楽浄土へと思いをよせて、お念仏をされたとあります。そしてその庵の西の壁に御名号を書かれ、その傍らには、このお歌を書かれたとあります。このお堂こそが、現在、骨仏で大変有名な大

阪“一心寺”の前身であり、このお歌は一心寺の御詠歌になっており、その壁に書かれたという直筆のお名号も現存しているそうでもあります。

この難波の地は、かつて水辺に生える長い草である葦（あし）が多い名所として知られており、「津の国」を次の「難波」の枕詞となし、「難波のここと」を「何事」という意味にかけ、さらに「葦」を「悪し」にかけるという、巧みな表現でつづられた味わい深いお歌の作りになっております。



大阪市営地下鉄谷町線の四天王寺前夕陽ヶ丘駅から徒歩約5分。